

Library Mate

イタリアの図書館散策

大学 美学美術史学科 助教授 片 桐 頼 継



早いもので在外研修によるイタリア滞在も半分を過ぎました。これまでこちらで経験した図書館にまつわるあれこれをお話したいと思います。

「ローマの休日」で有名なスペイン階段の近くに、ドイツの学術研究機関によって設立されたヘルツィアーナ図書館があります。これはフィレンツェの美術史研究所とならばイタリア・ルネサンス美術史研究の最高峰です。地元の研究者や学芸員だけではなく、世界中の関係者が利用しています。私も20年近く前の留学時代には、ここへ通い詰めました。しかし残念な

がら建物の拡張工事のために閉鎖されており、今回の研修中には利用できません。

そこで、街の中心に位置し、ムッソリーニが執務室のバルコニーから演説したことで有名なヴェネツィア宮殿の美術史・考古学図書館を利用しています。ここには、文化庁の本部とローマを中心とする各地の博物館を統括する部署があり、この建物の1階と2階が国立の美術史・考古学図書館になっています。また博物館・美術館も併設されているので、観覧したことがある方もいるかもしれません。この図書館のあるヴェネツィア広場までは、アパートからバス1本で行くことができ、たいへん便利です。

<写真 右:ローマ市立リスポリ図書館 左:ヴェネツィア宮殿(美術史・考古学図書館)>

但し、イタリアの図書館によくある事情ですが、15世紀に建てられた古い宮殿を図書館に転用しているため、必ずしも使い勝手が良いとは限りません。もとはサロンだった広間を間仕切りしており、さらにそうした広間は天井が高く、日本の建物ならばゆうに3階分はあろうかというほどです。その床から天井まで壁面全体にびっしりと書棚が並び、上の方の書物が利用できるよう、木造の足場や梯子のような狭く急な階段が備えてあります。そのため館内はまるで迷路のようです。さらに、資料の配架方法が現代のように移動配架法(分類配架法)ではなく固定配架法のため、開架式とはいえ複雑で、目的の文献にはなかなか辿り着けません。

また、貴重書は当然ながら閉架式になっており、出納専門の係員にお願いすることになりますが、30分も待たされたりします。開館時間は、午前9時30分から12時45分、イタリアの習慣であるシエスタを挟んで午後2時から6時まで。つまり午前中に閲覧できる本はたった数冊です。しかも時折係員のストライキ(イタリア語では「ショーペロ」といいます)があったりします。

複写に関してはセルフ方式ではなく、専門の係員に依頼します。文書の白黒コピーならば翌日、カラーコピーなどはもう少し時間がかかります。とはいえ、非常にありがたいサービスも実施されています。美術史関係の文献には図版が載っており、研究のためには不可欠な資料です。その図版をスキャンしてデジタル化し、CD-ROMに焼いてくれます。1週間ほど日数が掛かりますが、料金はカラーコピーと大差ありません。

さて、つぎにローマ市の公立図書館についてご紹介しましょう。やはりヴェネツィア広場近くにあるリスポリ図書館で利用証を作成しました。イタリアで図書館を利用しようとするときは、紹介状あるいは研究者であるとの身分証明書が必要な専門的な図書館を除いて、通常はパスポートの提示で入館・閲覧ができます。

利用証には“Bibliopass”(ビブリオパス)と“Bibliocard”(ビブリオカード)の2種類があります。前者はローマおよびその周辺に在住の一般イタリア人向けで無料。後者はそれ以外の利用者ならびに前者の希望者で、5ユーロ(約700円)を払います。このカードを所有すると、館内



にあるパソコンからインターネットが使える、ローマ市内の公立図書館だけではなくさまざまな図書館のOPACが検索できます。さらに美術館・博物館での入館料の割引や、書店での割引など、詳細はホームページに掲載されており、新しいサービスが随時更新されています。

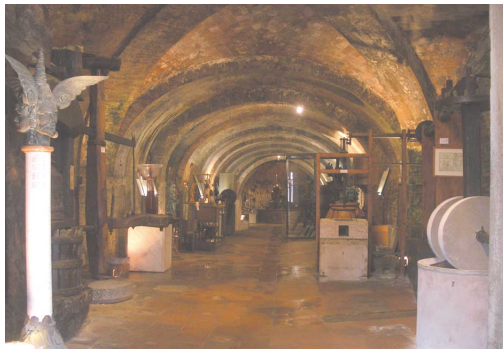
館内の構成は日本の公共図書館と似ており、一般書籍の他、新刊図書、新聞、雑誌、地域資料のコーナーがあります。また市内を専用車が循環し、自館で所蔵していない資料を他館より取り寄せてくれるサービスも日本と同様です。

ところで、私はミラノで開かれていたイタリアの日本学会に出席していたため参加できませんでしたが、9月18日(土)の午後8時から19日(日)の午前8時まで、“La Notte Bianca”(ラ・ノッテ・ピアンカ=白夜)という大イベントが行われました。これはローマ市、ローマ商工会議所、文化財省などの協力によって実現したもので、多くの映画館、博物館、商店、劇場などが夜通しオープンし、公共交通機関も多くの路線が特別運行され、ローマはまさに眠らぬ街と化します。もちろん市内のいくつかの図書館も参加しています。

- ・アッピア図書館
夜通しの音楽の演奏、詩の朗読、図書館主催のゲーム
- ・ポッロメーオ図書館「神話の夜 - 空は語る」
神話、夜、宇宙に関する本の朗読、望遠鏡による天体観察と写真展
- ・エルサ・モランテ図書館「夜の装い」
本の朗読と音楽鑑賞、ブックショップも夜通し開店

- ・エンツォ・トルトラ図書館
オンライン・ゲーム（ローマと夜に関するクイズで、文化、芸術、文学などの分野から出題）
写真展、映画上映
- ・フラミア図書館
ダンスと演奏、俳優による朗読、ビンゴゲーム（賞品は書籍）
- ・国立中央図書館「本と星」
時計図書館「本の迷路ゲーム」
参加者が書架の迷路の中を、著者名や本の一節を辿りながら、隠された宝物を探し出す。深夜0時過ぎには、来館者全員にコーヒーが振舞われた。
- ・バガニカ研究所図書館
建築や都市計画に関する種々のオブジェクトや模型、ビデオ、写真、バーチャル画像等が展示され、この研究所の活動の様子を紹介
- ・子供の家図書館
ローマ市の後援により、広場で喜劇の上演

この「ラ・ノッテ・ピアンカ」というイベントはもともとローマの姉妹都市であるパリから入ったものです。昨年開催された際には150万人が参加して大盛況でした。もちろん地下鉄やバスなどの交通機関も夜通し運行します。ただ去年は催しの最中に大停電が起こり、当然ながら地下鉄は止まり、街中の信号機が消えたためにバスも運行できなくなり、街に繰り出した群衆が立ち往生するというハプニングが起きました。このあたりも何ともイタリア的です。



さて、私はローマで研究活動をしながら、フィレンツェ近郊にあるヴィンチ村、すなわちレオナルド・ダ・ヴィンチの生地にはしばしば足を運んでいます。ここにレオナルド・ダ・ヴィンチ理想博物館という施設があり、レオナルドの手稿や素描を基に復元された機械類の模型などが展示されています。館長はレオナルド研究者として名高いアレッサンドロ・ヴェッツォージ教授で、私は彼の協力支援を得てレオナルドに関する研究を進め、またこの博物館が主催す

るレオナルド関係の展覧会企画などにも協力しています。



この博物館のすぐ上には、ヴィンチ市立レオナルド図書館があります。公共図書館ですが、レオナルド関係の専門書を数多く収蔵しています。研究紀要“Lettura Vinciana”を定期刊行しており、またしばしばレオナルド関係の講演会などが催され、イタリア各地から研究者たちが集います。

田舎の小さな図書館ですが、レオナルド研究の拠点のひとつとなっており、レオナルドの文献に通じた係員が資料の検索や図書の貸出などのサービスを提供してくれます。あれこれ文献を閲覧すると、次回来館するときまでそれらの一式をそのまま保管しておいてくれますので、研究を続けるのにとっても便利です。

この図書館の前にはレオナルドが洗礼を受けたサンタ・クロチェ教会があり、周囲にはレオナルドが親しんだのどかな自然の風景が広がります。時折それらを窓から眺めながら静かに文献を読むのは、レオナルド研究者にとってはまさに至福のひと時です。

日本では大半の図書館がコンクリートで作られた新しい建物に入っていますが、ヨーロッパでは由緒ある城郭や宮殿内に作られた図書館が数多くあります。蔵書それ自体の価値はもとより、図書館の建物も建築史や美術史の観点から高い価値を有しています。その意味で図書館はまさにその街あるいは国の知と歴史の蓄積です。この在外研修を通じて、図書館の存在の重みを実感しました。

参考図書：アレッサンドロ・ヴェッツォージ著 高階秀爾監修『レオナルド・ダ・ヴィンチ 真理の扉を開く』（知の再発見双書79）創元社 1998

[注：著者名は、文中ではイタリア語の発音により近い表記「ヴェッツォージ」になっています]

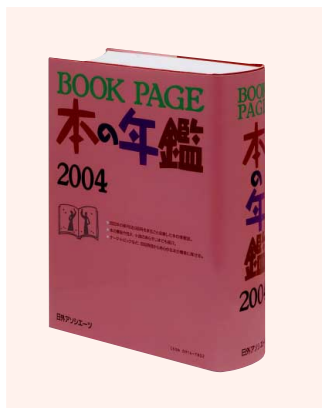
<写真：レオナルド・ダ・ヴィンチ理想博物館内(2点)>

データベース今昔

「BOOK」データベースのこと

短大 日本語コミュニケーション学科 教授

三 浦 勲



私は企業生活35年のうち25年間、データベースサービスの業務に就いていた。大学図書館でも使われているOCLC、DIALOGを日本の市場に導入したのは、1980年代のこと

であった。ISIのScience Citation Indexのデータベースを導入してバッチで情報検索サービスをしたのは、その10年前のことである。

手がけてきたさまざまなデータベースビジネスの一つに「BOOK」データベースの構築があった。この事業は、1986年(昭和61年)に、取次大手のトーハン、日販、紀伊國屋書店、出版社の日外アソシエーツの4社共同事業としてスタートし、現在も継続している。20年も前にこのデータベースを構築することになった理由を、当時のプレスリリースは次のように伝えている。

「我国では毎年4万余点の図書が出版されておりますが、これらの新刊を迅速に探し出し現物を入手する図書情報システムの確立は、図書館界をはじめ一般読者からも永年にわたり要望されてまいりました。それに応え国立国会図書館、トーハン、日販などが個別に図書の書誌的情報をデータベースとして作成し、一部オンラインサービスも実施しております。しかし、選書、購入の判断に必要な内容情報が不足していました。その現状に堪がみ、ここに、4社が協力し合い、書店、図書館、資料室、研究者のほか、一般読者も含めた消費者に役立つ実用的なデータベースをめざし、新刊図書内容データベース「BOOK」の共同構築事業を開始しました」

データベースは、迅速な更新とそれの継続

がなければ価値がなく、それを実行するためには莫大な費用を要する。出版社からも情報掲載費を徴収したが、殆どの費用は4社が負担し、今日に至っている。1988年には、『BOOK PAGE 本の年鑑』という冊子としても出版されたが、当時、ある図書館員は、この年鑑を「無人図書館」と評した。このデータベースの世界に類のない特徴は、図書の内容情報にあるが、これが一冊あれば図書館の代わりになるという意味合いであった。

インターネットによるオンライン書店が殷賑を極めていくが、アマゾンジャパン、楽天ブックス、ブックサービス、ヤフーなどの書籍情報には、「BOOK」が使われている。また、東京大学、立命館大学、大阪市立中央図書館、横浜市立中央図書館など多くの図書館が、自館OPAC蔵書MARCに「BOOK」データベースの概要・目次・インデックス部分を付加して使用している。

20年前にこのデータベース構築が始まったとき、出版社をはじめ周囲から必ずしも好意的な理解が示されたわけではなかった。共同事業4社は、「出版界の社会的資産を蓄積するために」をスローガンに、来たるべきネットワーク時代の出版販売の情報提供面のインフラになるとの確信のもとに、利害を超越して業界発展のために先行投資を行ってきた。

2004年10月現在のデータ量は85万件に達している。取次に日々持ち込まれるすべての新刊の表紙・目次・帯・奥付をコピーして、その日のうちにデータベースに加工するという作業は、たった今やらなければならず、避及できないことではない。

2005年には、構築20周年を迎えるが、現在読者にオンライン書店という無人書店の場を提供しているという一事を見ても、このデータベースは、立派な社会インフラになったといえる。

「BOOK」データベース誕生の当初からこの事業の事務局を務め、『本の年鑑』の発行人でもあった者として、感慨一入である。



学生に薦める本

都市の日本：所作から共同体へ

オギュスタン・ベルク著 筑摩書房,1996

(短大図書館所蔵 361.78 B53)

日本の風景・西欧の景観

オギュスタン・ベルク著 講談社現代新書,1990

(大学図書館所蔵 080 Ko19 1007)



学生時代を送るみなさんに、私自身の書棚を振り返りながら何かをご紹介しますということになれば、今このときにおいては、

何をあいてもデリダDERRIDA, Jacquesに触れないわけにはいかないでしょう。私には彼を追悼するような正当性は持ちませんが、それでも彼の思想が自分の形成期に深い影響を与えたことを認めないわけにはいきません。

最初に大学院生であった頃に、今期はデリダを読むと伝え聞いて、仏文研究室の扉を叩いたときのことが思い起こされます。それは確か、De la grammatologie, Minuit, 1967(『根源の彼方に グラマトロジーについて』、足立和浩訳、現代思潮社、1972年)でした。そして私にとって重要なことは、その研究室で引き続いてベルク Berque, Augustinさんの本と出会うことになったことです。その出会いは、私のその後にとって決定的なものになりました。フランス語も独学で稚拙な私を、我慢してその場に留めおいていただいた荒木亨先生とは、その後も長い師弟関係が続き、先生の研究交流を通じて、後にベルクさんとの知己を得ることもになりました。

ここでは、トピカルでもあるデリダの本からはなれて、そのベルクさんの著書のいくつかについてご紹介することとしましょう。デリダの本については、研究領域や専門性の点から、あまり多くの学生のみなさんとは意味を共有することができないかもしれません。しかし、ベルクさんの著書が直接に向かうところ、そして荒

大学 生活文化学科 助教授

犬塚 潤一郎

木先生と私とが会いそれぞれにその後の歩みを進めてきたところは、現代を生きるほぼすべての学生のみなさんと、本質において共にされるものではないかと私は信じているからです。

さて、私が最初に読んだのは、Le Sauvage et L'artifice - Les Japonais Devant La Nature(『風土の日本』、篠田勝英訳、現在はちくま学芸文庫)の第4章 Nature Sauvage, Nature Construite(「野生の自然、構築された自然」)でした。学期が終わり仏文研究室を離れた後は、ベルクさんの本を、もっぱら翻訳で順に読んでゆくことになりましたが、新しいページを開くごとに、ここにこそ自分が求めてきたものが、自分自身の内のなかですっと考え続けてきたそのことが、明らかなかたちで書かれていると、まさにある種の興奮と感動とを得ながら読み進めていたことが、今でもありありと思い出されます。

なかから最初にお薦めするのは、ベルクさんの問題意識やアプローチの仕方、論の展開様式をわかりやすく伝える『日本の風景・西欧の景観』そして造景の時代』(篠田勝英訳)です。手軽なサイズと見かけの本ですが、現代的な比較文化論としても、デリダに代表されるポスト・モダンの志向のあらわれ方やスタイルを感じ取るためのものとして、あるいは学的な精密さ・構築と詩的なおもむき・表現とのまねな総合を実感させるものとして、また単に知的な楽しみとしても、読む人を魅了せずにはおかないでしょう。

そしてもう1冊、『都市の日本 所作から共同体へ』をお薦めします。日本の都市の分析を通じて、現代を生きる私たちにとっての本質的な課題とその意味が解き明かされてゆきます。単に研究者の知性にとどまらない、ベルクさんの豊かな感性とその表現力によって生み出された、作品性を持つ本といえるものです。特に私にとっては、当時その訳出に取り組みされていた荒木先生と読み交わした、すばらしい経験の記憶と共に忘れがたい本となっているものです。

本は本質的に、個人の自由の礎であると共に、師と呼べる人と共有する、それぞれの人生における“黄金の時間”を仲介するものであると、ベルクさんの本の紹介にあたり、あらためて思い至ります。

近隣図書館紹介

～第3回 東京都立多摩図書館

今回訪問したのは、児童・青少年、文学、多摩地域資料を中心とした情報サービスを行う東京都立多摩図書館（以下、同館という）である。

同館は、立川市錦町にある東京都多摩教育センターの1階奥にある。同センターは一昔前の建物といった感じである。同館にはユニークなコレクションが多数ある。児童・青少年用図書14万冊、日本の近現代文学作品13万冊、多摩地域資料9万冊などだが、今回のお目当ては、地下書庫にある特別コレクションである。

山本有三文庫

最初は地下2階の「山本有三文庫」である。これは1975年にご遺族から東京都に寄贈された小説「路傍の石」や戯曲「米百表」で知られる作家・山本有三氏の旧蔵書である。残念ながら、ここには遺品や自筆原稿、及び氏が尽力した「ミタカ小国民文庫」の蔵書はなく、大正初期から晩年までに愛読し、調査・研究に使用した文学、国語、歴史を中心とした図書約1万4千冊、雑誌320誌がある。

氏は戦後まもなく国語国字問題に取り組み、晩年には古代史についての調査研究を熱心に行ってきたが、ずらりと並んだ図書の背表紙だけを見るだけでも氏がそのとき何を考え、行動したかが伝わってくるようだ。『文学館のある旅103』（集英社新書）によれば、遺品や原稿がある三鷹市山本有三記念館には年間3万人が訪れるという。独立文庫にできたならばもっと良いのに、とふと思った。



雑誌創刊号コレクション

同館は約6千点と充実した所蔵一般雑誌・新聞を所有する図書館と知られる。それらのバックナンバーの書庫と同じ地下1階に、1983年から現在まで約2,300点の創刊号を集めたコレクションがある。『出版年鑑』によれば、毎年200点前

後の雑誌が創刊されるというから、ほぼ20年すべての創刊号が揃っていると思ってよい。「雑誌は時代の鏡」と言われる。現在、これらは創刊年月順に配架されているが、これら一冊一冊表紙を見せて一室に展示できたなら、見た人は当時の世相や流行だけでなく、自分自身の記憶さえも呼び起こすだろう。しかし、同館も書庫不足が深刻だそうでこれは果たせそうにない。



両コレクションとも1階の開架書庫にないため直接手にとって見ることはできないが、カウンターに申し出れば閲覧と複写は可能である。また、山本有三文庫は都立図書館OPACで自宅からも検索できる（請求記号にY/Y8104のようにYがあるもの）が、創刊号コレクションは検索できないので問い合わせが必要である。

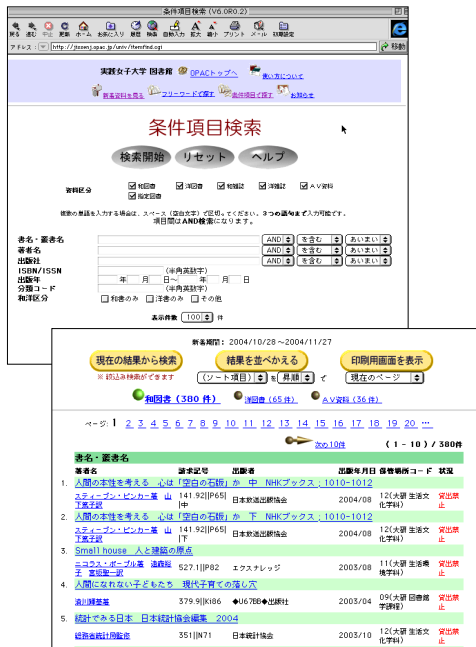
今回はコレクションに特化した紹介となったが、同館は対図書館以外の館外貸出がないことから調査研究に適した図書館である。11月末には閲覧室レイアウトの大変更が行われ文学エリア等が新たに設けられるとのことである。来館すれば力強く頼もしい図書館にきつとなってくれるはずだ。（取材日：2004年10月23日）

< 東京都立多摩図書館 >
立川市錦町 6-3-1
HP:
www.library.metro.tokyo.jp/
OPAC:
catalog.library.metro.tokyo.jp/
蔵書図書:
一般図書 30万冊
雑誌 6千点
座席
134席（パソコン用12席あり）
アクセス:
南武線西国立駅から徒歩10分

Library Mail

Web 版蔵書検索がバージョンアップ!!

大学図書館・短期大学図書館のWeb版蔵書検索がバージョンアップしました。
検索スピードが大幅に向上し、一覧表示画面等もより見やすくなりました。



また検索結果の表示画面で、著者名のリンクをクリックすると、実践で所蔵しているその著者の著作すべてを表示できる便利な機能もつきました。さらに検索結果を著者や出版社など、自由な項目で並べ替えることもできます(横断検索は除く)。皆さんも是非、使ってみてください。

URL

大学・短期大学横断検索
<http://jissenj.opac.jp/cross/>

大学図書館蔵書検索
<http://jissenj.opac.jp/univ/>

短期大学図書館蔵書検索
<http://jissenj.opac.jp/univ/>

英文学科創設 80 周年記念英文学科関係書籍展示会の報告

文学部英文学科が、今年2004年をもって創設80周年を迎え、これを記念して英文関係図書・雑誌の展示会が行われた。図書館もこの展示会に協賛し、多数の図書・雑誌を提供した。

展示は、著名な英文学者・本間久雄先生の著作、英文学科紀要「実践英文学」の変遷、『ケルズの書』復刻版、シェイクスピア、アメリカ文学、古英辞書、18～19世紀英文学、というようにコーナー別にテーマを設け行った。前号で生誕150年を迎えたオスカー・ワイルドの資料展示を計画していると案内したが、これは同展示会の一コーナーに組み込まれることになり、ワイルドの直筆書簡1通と毛髪、「サロメ」を始めとした初版本の展示を行った。

また、主催の英文学科からは卒業アルバムや退職された諸先生方のパネルが展示され、同学

科の80年の歩みが一目で分かるようになっていた。

展示は、平成16年10月14日(木)から常磐祭最終日の11月14日(日)まで行われ、500名近くの在校生や卒業生、外部の方々が訪れ、好評のなか終了した。



❁ ❁ ❁ いんふお-め-しょん ❁ ❁ ❁

2004年12月～2005年3月

大学図書館

冬休み特別貸出

期間：12/13(月)～12/24(金)

返却日：1/11(火)

対象：図書のみ 冊数無制限

指定図書・雑誌は通常通り

冬休み中の開館

開館日：12/21～22, 24

開館時間：9:00～16:00

試験期の貸出・開館時間について

1/6(木)～1/22(土) 3日間貸出

対象者：大学生・短大生

土曜日の開館時間延長(～17:00)

試験終了後(1/31～)の開館について

開館時間：9:00～16:00

春休み特別貸出

期間：1/24(月)～3/24(木)

返却日：4/8(金) 卒業予定者 3/19(土)]

対象：図書のみ 冊数無制限

指定図書・雑誌は通常通り

休館日

1/14(金)、1/15(土)はセンター入試のため休館

1/31(月)～2/5(土)は入試のため休館

2/21(月)～3/5(土)は蔵書点検のため休館

3/7(月)～3/9(水)は後期入試のため休館

3/25(金)～4/4(月)は新年度準備のため休館

短期大学図書館

冬休み特別貸出

期間：12/13(月)～12/22(水)

返却日：1/11(火)

対象：図書 冊数無制限 AV資料 6点

指定図書・雑誌は通常通り

冬休み中の開館

開館日：12/21(火)～22(水)

開館時間：9:00～16:00

試験期の貸出

1/6(木)～1/22(土) 3日間貸出

対象者：大学生・短大生

試験終了後(1/31～)の開館について

開館時間：9:00～16:00

春休み特別貸出

期間：1/24(月)～3/19(土)

返却日：4/8(金) 卒業予定者 3/19(土)]

対象：図書 冊数無制限 AV資料 6点

指定図書・雑誌は通常通り

休館日

1/15(土)はセンター入試のため休館

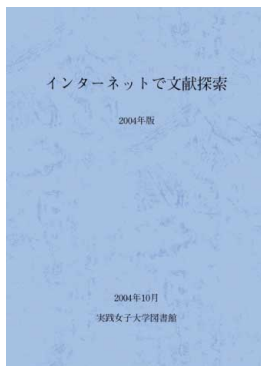
1/31(月)～2/10(木)は入試、書庫内点検のため

3/9(水)は短期大学の後期入試のため

3/20(日)～4/4(月)は卒業式、新年度準備のため

詳細や変更は掲示にてお知らせします。

配布しています



冊子『インターネットで文献探索』の最新版ができました。配布を希望される方は、大学か短大の図書館カウンターまでおいでください。また、卒業生の方は、大学図書館までお問い合わせください。

編集後記

巻頭の特集を読んで、実際にイタリアへ行ってみたいと思った方も多いのではないのでしょうか。次号の巻頭特集は本学卒業生による「パリの図書館」を予定をしています。ご期待ください。

Library Mate 第33号 2004年12月

発行所 実践女子大学図書館
東京都日野市大坂上4-1-1
URL:<http://www.jissen.ac.jp/library/>
実践女子短期大学図書館
東京都日野市神明1-13-1
URL:<http://www.jissen.ac.jp/library/jcol/>

発行責任者 日 浅 和 枝